

学べる症状シリーズ Vol. 4

気胸

施術事故による気胸の発症は鍼師に限定されますが、JHAに寄せられる相談で「利用者が気胸を発症した」という内容は年間20数件にのぼります。当会の鍼師資格保有者は2,500名強ですので、年間で100人に1人程度は発症させてしまう計算となり、最も件数が多い骨折と同等の事故発生率となっています。

【気胸とは】

気胸とは胸腔内に空気がたまり、肺が瀕死の状態になる病気です。一般的な症状は咳や胸痛や呼吸困難です。原因によって、自然気胸、外傷性気胸、医原性気胸に分けられます。

自然気胸は、気腫性嚢胞の破裂によって生じる自然気胸、他の肺疾患に続発して起こる続発性（症候性）気胸に分けられます。自然気胸は20～30歳前後の長身痩身型の男性に多く発症するといわれています。

一方、続発性気胸は基礎疾患の分布から高齢者に多くみられます。

外傷性気胸は胸部の強い圧迫や、針治療、折れた肋骨などで肺が傷ついて起こります。

【発症のタイミング・内容】

発症のタイミングは施術中（直後）から急激に発症するか、鍼治療後数時間かけて症状が増強します。

呼吸をしても大きく息が吸えない、運動をすると呼吸ができなくなるなどの呼吸困難、頻脈、動悸、咳などが見られます。発症初期には肩や鎖骨辺りに違和感、胸痛や背中への鈍痛を感じることもありますが、肺の虚脱が完成すると胸痛はむしろ軽減します。痛みは人によって全く感じない人もいます。

☆=====☆

初期段階での気胸の基本的な治療方法は、無理な姿勢や運動をせず、無理に呼吸をしないで、安静にして自然治癒を待ちます。

自覚症状が無いまま完治してしまうこともあります。一般的に治療期間は2～3日で自宅安静をすることで良好になります。

重傷の場合は静脈や動脈の損傷に伴う血気胸となり、手術を含め1週間を超える入院とその後の通院が必要な場合もあります。

【施術事故による気胸】

施術事故における気胸は、胸部・背部・あるいは鎖骨上窩の経穴への鍼治療により発生しますが、その状況は大きく次の2つに分けられると考えられます。

- ① 深刺による直接的な肺または胸膜への傷害により発症するもの
- ② もともと気腫性嚢胞を持ち合わせていたと思われる利用者が鍼治療の影響により発症するもの

JHA調べでは①と②の割合は1：4程度で、全体の半数はわずかな刺激によって発症したものと鍼治療とは関係なく自然気胸が発症したものと考えられます。

発症した利用者の年齢・性別はさまざまですが傾向としては、自然気胸を発症しやすいタイプ（若い長身痩身型の男性）の利用者で過労状態にある方が最も目立ちます。このような利用者には、他の施術に切り替えることが事故を未然に防ぐ有効な手段とも考えられます。

当然のことながら、鍼を抜き利用者の状態を確認するまでが鍼師の仕事です。施術の基本を再度確認し、気胸に限らず発症する恐れがある症例や初期対応を理解した上で、必要があればたとえ確率は低くても危険性を利用者に告知理解を受けた上で施術を行うことが鍼師としての義務であると考えます。

☆ ☆ ☆ ☆

【施術者の責任】

施術者の責任については医師の判断にもよりますが、ほとんどのケースで「慎重に施術を行っており、肺や胸膜には届いていない」という主張は認められません。実際に裁判を行った事例では「請求額の減額は認められるものの、施術者に責任がないとは言えない」という結果が多数となっています。

万が一、施術直後から胸痛や息苦しさを訴えられた場合は、状況を説明し『安静にして2～3日様子を見て下さい』ではなく、『多少でも苦しさが増すようなら早めに病院で診察を受けてください』という対応を心掛けてください。

JHA NEWS

・無料相談（アドバイス）・手技療法に関する情報提供・当会ホームページへの求人情報の無料掲載・賠償責任保険の適用

国家資格者
会員種別
正会員A 準会員

すべての手技療法家、施術家に
安心・安全を提供します

民間資格者
会員種別
正会員B

入会金無料

【ご不明な点・詳細につきましては、お気軽にお問合せ下さい】

JHA 有限責任 日本治療協会
中間法人

URL: <http://www.jha-shugi.jp>

◎ JHA NEWSのバックナンバーはホームページでご覧いただけます ◎

TEL: 03(5289)8171
10:00～18:00(平日)

FAX: 03(5289)8173
24時間年中無休

郵送先 〒101-8691 日本郵便神田支店 私書箱46号

E-mail: info@jha-shugi.jp